131-03

インカ帝国の文化

「太陽の祭り」と記録法キープ

――一九六一年関西学院大学ペルー・アンデス探険学術報告(1)――

川村大膳

目次

序
一　インカの古都クスコ
二　太陽の祭りインティ・ライミイ
三　インカの記録法キープ
四　現代のキープ
参考書目
おわりに

序

満目荒涼たる灰褐色の高原(パンパ)と山また山。その中に千古の氷河をいただいた純白の峻峰が、くっきりと青空を切って浮かび出ている。水鳥の羽音以外に何ひとつ聞こえない氷河湖の、文字通り紺碧の美しさは、この世のものとは思え

ない。殆んど雨のふらない六・七・八月の、乾燥期のアンデスは、われわれの網膜から消え難い夢幻の境地である。

ここはまた、南米最大の原住民の国インカ帝国が栄えた地である。十六世紀に忽然とあらわれた白人征服者（コンキスタドール）のために、瞬く間に亡ぼされ、かつての栄光の歴史は再び戻らず、人種的には東洋人と連なっているだけに、その哀嘆は、われわれの胸に通ずるものがある。しかも、彼らの子孫インディオは、この国人口の大半を占めながら、わずか一握りほどの白人のために支配され、極貧の生活にあえいでいる。それがスペイン植民地より独立してから、すでに百数十年を経過した今日、この通りであるから、驚きはなおさらというほかない。

インディオは、もとよりペルーの各地にいる。しかし、われわれの踏査した第二の目的東南部ペルー、すなわちインカ帝国の古都クスコ周辺において、昔ながらの、最も特色ある彼らの実態に接することが出来る。ことに、われわれは、六月二十四日、インディオの日といわれる「太陽の祭り」インティ・ライミイを、クスコにおいてまのあたり見ることが出来た。数百の衛兵にかしずかれ、古式豊

地図　1

地　図　2

かに輿にのって台座につくインカ大王、それに従う人々の衣裳や、くりひろげられる儀式によって、幾らかでも盛んなりし日のインカ文明に接し得たかも知れない。しかし、今日のインティ・ライミイは、十年ほど前から復活され、故実を伝えるもので、いわば観光客相手のショウに過ぎず、もとよりインカ王も、この日だけの役者である。かつて、タワンチン・スウユ（インカ帝国）を支配し、その領域においては、「余の許しなくして、鳥一羽とべず、木葉一枚そよぐことあたわず」と豪語した、五百年前のインカ王は、もはや過去のものである。この祭りに踊りをくりひろげるインディオの中に、シルクハットをかむり、白粉と高い鼻をつけて、かしやくなき誅求をこととする白人弁護士を揶揄し、諷刺する一団がいたのが印象に残るが、この伝統的な祭典を通じて、民族的気魄といったものは概して感ぜられず、ただ、日々卑屈に暮している彼らが、天下晴れて一日を陽気に踊りほほけるといった気分が強く支配していた。また、学齢期に達するか達し

ないぐらいのインディオの牧童が素足で、南部アンデス特有の動物ヤーマの群を追いながらわれわれのベースキャンプ近くにあらわれ、空鑵をねだって行く姿にも、いい知れぬ淋しさを感ぜずにはおれなかった。

この調査は、一九六一年度関西学院大学の派遣したペルー・アンデス探険隊の学術調査の一部であり、筆者は、ペルー国立クスコ大学の考古学者マヌエル・シャベス・バイヨン博士、同人類学者オスカー・ヌーニェス・デル・プラド博士の業績と助言に負うところ多く、両教授にはもとより、斡旋の労をとられたクスコ在住の、河村侃、大村昌次両氏に心から敬意を表し、さらに遠征に御協力いただいた内外の各位にも心から感謝の意をあらわすものである。

この稿では、インカ帝国の文化理解を少しでもすすめるために、クスコにおいてわれわれが調査した資料にもとづき、「太陽の祭り」と、インディオの記録法であるキープについて述べる。なお探険隊一行の学術調査に関しては、とくに隊員長井弘光氏の協力を得たことを附記しておく。

一　インカの古都クスコ Cuzco

ペルーの東南、アンデス山系のまっただなかに出来たインカ帝国の首都クスコは、今日なお人口九万を擁し、クスコ県庁の所在地である。海抜三四〇〇メートルという高地に位置する地理的環境と、インカ時代はもとより、スペイン植民地時代を経過しているだけに、歴史の香りが強く、他のペルー諸都市と著しく趣きを異にしている。その意味では、さしずめ日本の奈良に相当するといえよう。

現在クスコに入るには、太平洋岸の首都リマから、毎日旅客機の便があり、二時間余りでいとも容易に運んでもらえる。また遠く、南部のペルー第二の都会アレキッパから、ボリビア国境のチチカカ湖周辺を通り、四〇〇〇メートルの高原と山岳地帯を越えて、イギリス系鉄道が通じている。しかし、もっとも安直なのは、リマから出る乗合バス

であり、さらに荷物とともにトラックに乗込む方法で、文字通り重畳たる山間をよぎり、ペルーの自然や人に接するよい機会とはなるが、スリルと疲労も第一級であろう。

ペルーの最高峰ワスカランの登頂を終えたわれわれが、リマの中央部、南米最古といわれるサン・マルコス大学前の広場から、クスコ行のバスに乗込んだのは、六月二十一日午前九時であった。車は中型、乗客の手荷物を屋根に積みあげ、網をかぶせて落ちないようにし、座席には防寒着を持ち込んだ乗客が、この駅馬車然たる一千粁の遠乗りにいささか緊張の面持ちである。二人の運転手が交替でハンドルをとり、食事のときに少憩するだけで、昼夜をわかたず走りつづけた。はじめは草一本生えていない太平洋岸の沙漠地帯を、パン・アメリカン・ハイウエイに沿って、時速百粁以上のスピードでつっ走る。やがて、イカを過ぎ、ナスカを経るころから山地にかかり、それからは、山また山の連続。四〇〇〇メートルをこえる峠の急カーブに胆を冷し、泡立つ渓谷の急流にかたずをのみ、砂ぼこりと、睡気と、土人の臭気になやまされながら、雄峰サルカンタイ Salcantay の麓を通り、アンタよりひらけるクスコ盆地をすぎて、目的のクスコに到着したのは、二日目の真夜中であった。

クスコ盆地は、西にヴィルカバンバ Vilcabamba、東にヴィルカノータ Vilcanota 山群をひかえ、要害堅固の土地である。インカ時代にはこの盆地のはずれ、西にはオヤンタイタンボ Ollantaytambo、東にはピキャクタ Piquillacta の要塞を設け、また、スペインの征服時代に、インカの逃げのびたといわれる要塞都市マチュ・ピチュ Machu-Picchu[1] や、その他のとりでを四囲の山岳地帯に配置して、そのスケールの大きさは、いかにも南米に君臨した山岳民族の帝都にふさわしい。

クスコの街で、現在最も目につくのは、中央広場プラサ・デ・アルマス Plaza de Armas はじめ、いたるところにそびえ立つ大寺院の建築[2]である。スペインの征服者達がこの町を占領したのが一五三二年、その後叛乱時代を経過

し、スペイン政府が総督を派遣して完全に植民地統治をはじめたのが、一五四一年以後のことである。スペイン時代における統治政策の一大特色は、原住民の徹底したキリスト教化であり、数多くの寺院や、山間僻地にまで普及したキリスト教がそれを物語っている。また中央部に現存している数多くのスペイン貴族の旧邸宅[8]は、彼らの支配力がいかに強かったかを示すものといえよう。

しかし、少し注意すると、この町のいま一つの特色は、これらのスペイン建造物が、概ねインカ時代の礎石の上に出来ていることである。われわれは、町の随所に、またこの町の周辺要所に、インカ時代の遺跡をみるのである。それらは主に石造りであり、その石組みが精致をきわめ、比類まれな堅牢さをもつゆえに、今日なお保存され、あるいは利用されている。そのほか、もう一つこの町に異彩を放たしめているのが、夥しい原住民のインディオである。ペルーの人口構成は、白人（ブランコ）五〇万、混血人（メスチソ）五〇〇万、インディオ五〇〇万といわれ、国中どこへ行ってもインディオは見られるが、クスコ及びその周辺山岳地帯のインディオは、インカ時代の風習をそのままに伝えているものが多く、男も女も、色彩豊かな毛織の衣服をまとい、風変りな帽子をかむり、ときにこれらの人達が、ヤーマ llama[4]の群をひきつれて、クスコの石畳みの上を通り過ぎる光景は、西欧文明と原住民文化が入りまじり、南米でもとくにクスコならでは見られぬ情緒を漂わすものである。

クスコがインカ帝国の首都になった理由は、様々あるであろう。この地が要害堅固なことは前述の通りであるが、山岳地帯でありながら、この盆地及びその周辺は、原住民の主食とするトウモロコシ、ジャガイモをはじめ、農産物に恵まれている。ヤーマ、アルパカ、ビクニヤなど、高地に適する動物がおり、そのほかアマゾン上流地方から豊かな産物を運ぶことも出来た。また、今日なお豊富にある金・銀・銅などの鉱産物に恵まれていた。しかし、さらに注目すべきことは、この海抜三四〇〇メートルの、酸素が乏しくて大火の生じないようなところで、寒暑の差はいたって少な

く、たぐいまれな健康地であることである。呼吸器系はじめ伝染病が大へん少ないのは、医学の進歩しない時代に、人間の居住条件として、これにまさるものはあり得ないと考えられる。

周囲は、山岳地帯でさえ、きわめて樹木に乏しい。森林といえるほどのものは殆んどなく、ところどころに見られるユーカリの植林は、百年ばかり前に、オーストラリアから移植されたものである。インカ時代から残っているチャチャコーマにしても、幹の曲りくねった灌木に過ぎず、この点で、大樹の森林公園の中にうち沈んだ奈良とは、全く対蹠的である。インカ民族は、その手先の器用さを、石材、金属、繊維類[5]に向けるよりいたしかたなかった。

さて、われわれが、探険の基地であるクスコに、六月末、いきをきらして駆けこむように辿りついたいま一つの理由は、この地で年に一度行なわれる、インディオの大祭「太陽の祭り」インティ・ライミイに間に合うためであった。

(1) マチュ・ピチュ Machu Picchu
クスコよりヴィルカノータ河を下り、ウルバンバの山深く、断崖絶壁の上にマチュ・ピチュの要塞がある。ここは一九一一年七月二五日、エール大学のハイラム・ビンガム教授によって発見されたインカ最大の遺跡である。一九六一年七月二三日（日）には、発見五十年祭が現地で行なわれ、ビンガム二世、アメリカ大使など出席の下に、盛大な催しがあり、筆者もそれにあずかることが出来た。

(2) プラサ・デ・アルマスに面して、カテドラルとラ・コンパニアがそびえ、少しはなれて、ラ・メルセード、太陽の神殿跡にサント・ドミンゴ、太陽の処女の住居アクヤワシの跡にはサンタ・カタリナ、その他、サン・フランシスコ、サンタ・クララなど、巨大なスペイン風の大寺院が見られる。

(3) カテドラルの北方丘の上にある提督公邸が最も有名である。その他プラサ・デ・アルマスの周辺要所には、数多くのスペイン貴族の旧邸が残っている。

(4) ヤーマは、ラクダ科に属しアンデスに特有の動物である。毛は多いがあらく、肉は上質でないが、インカ時代には衣類や食用に供せられた。性質はおとなしく集団で放牧されており、峻しい坂道を容易に歩くが、駄獣として重い荷を運ぶには適しない。

(5) インカ並びにプレ・インカの美術的工芸品については多くの蒐集並びに報告があるが、筆者はとくにリマ在住の天野芳太郎氏

のコレクションを通じて、鉄を知らない彼らが銅の合金で鋭利な刃物をつくり、また織物としてはベッチン、メリヤスから、紗、羅などの薄物にいたるまで千年以上前につくっていたことを知り、驚嘆した。

二　太陽の祭りインティ・ライミイ(1)

六月二十四日、南半球の冬至にあたって、ペルー全土にインデオ最大の祭典インティ・ライミイがくりひろげられる。とくにインカ帝国の首都であったクスコが、その中心になるのは当然であろう。この日午前中、群衆のくり出すクスコのプラサ・デ・アルマスには、知事や大司教はじめ来賓に敬意を表すべく、各地から集まったインディオの一団また一団が、古式豊かな思い思いの服装に身をかため、囃子にうち興じながら、広場を一周して大祭の前景気をもりあげてゆく。午後になると、踊りのインディオ達は、クスコの裏山にあたるサクサイワマン Sacsayhuaman 要塞へ上り、群衆もこれについてあらゆる乗物を動員して集まり、大祭の行なわれる百メートル四方の大広場をのこして、まわりの要塞の岩山には、万をもって数えるほどの見物人が、外国からの観光客も数多くまじえてつめかける。

午前中プラサ・デ・アルマスで踊ったインディオ達は、この広場にくり込み、その周辺を踊りながらねりあるき、大祭の雰囲気をいやが上にも高めているが、やがて満場かたずをのむ中に、岩山の一角から数百の衛兵にかしずかれたインカ王が、古風なみこしにのってあらわれ、広場の中央に設けられた台座へと向う。いよいよ大祭が始まるのだが、われわれはここで思いを数百年前のインカ帝国によせ、年代記作者達の史料(2)にもとづき、祭典のもつ意義を調べることにしよう。

一、祭典の意味

この民族にとって、農業自然を支配する太陽は、祖先として崇拝されていた。六月下旬にこの太陽の祭りが行われ

る理由をあげると、第一に、彼らが本年度豊かに与えられた収穫を太陽に対して感謝し、いけにえを捧げてその意をあらわす。第二に、まさに始まらんとするつぎの農業年に、より豊かな収穫を祈願し、同時に吉凶を占なう。第三に、一番太陽が遠ざかる時期にあたって、インカ王と僧侶達がこれを再び人間世界へ呼び戻そうとする。第四に、儀式、踊り、贈物、大饗宴を通じて、太陽の子らの相互の親睦と、同時にクスコに集まったタワンチン・スウユの全種族の長が、インカ王に忠誠を誓い、統一のきずなを堅くすることなどがあげられる。六月は収穫を終り、農業暦の締めくくりであると同時に、冬至とはいえ赤道に近い熱帯圏のこととて、太陽の光線は強く、六・七・八月の乾燥期は殆んど雨を見ない太陽の最も美しい時期でもある。[3]

二、祭壇と出席者、諸準備

祭典の行なわれた場所は、クスコのプラサ・デ・アルマスにあたるインカ時代のワカイパタ Huacaypata（悲しみの広場）で、その中央に角錐状の台座ウスヌ Usnu が設けられる。冬至の日は、僧侶や賢人達が広場のサイワ Saywa と称する四本の石柱によって生ずる太陽の影から測定し、それより九日間を祭典の日と定めた。出席者は、まずインカ王とその一族、僧侶、インカ民衆、地方の族長達、そのほか、インカ王がクスコにかくまった太陽の処女達、衛兵、各地からの踊り子などで、王及び王族が主広場であるワカイパタに集まるのに対し、他の人達はそれにつづくもう一つの広場クシパタ Cusipata（喜びの広場）に集まる。

台座に上る王は、頭上に王を象徴する真珠の飾りマスカイパチャ Maskaypacha を冠り、その上に珍しいコラケンケ鳥の羽をつけ、両手首に金の腕輪チパナス Chipanas をはめ、胸に金の胸飾りプラ・プラ Pura-Pura を下げ、耳に耳飾り、腰に装飾の入った長袍ウンク Uncu を、肩に毛織りのマント、首まわりには太陽の七色光をあらわす色とりどりの鳥毛をまとい、ももには網目のサクサ Saqsa、足にはサンダルの履物ヤンキス Llankis をはく。台座の中

ほどには、猫属のチンチャイ Chinchay[4] を型どった金の王座ティアナ Tiana がしつらえてある。台座の周囲に王族貴族がならび、台座のすぐ後に二人のせむし男クミュス K'umillus が、王の象徴である徽章をもってはべり、その一人は太陽の七色光を模した極彩色の日傘アチワ Achiwa をかざしている。その後方にも、インカ王の象徴である旗ウナンチャ Unancha がかかげられた。

祭典の日にそなえて、僧侶達は、式場、供物、犠牲（イケニュ）をととのえた。太陽の処女達や従者達は、当日消費される多くの飲食物を用意する。地方から集まる諸種族の長達は、随員をつれてくり込み、彼らはクスコの町の、それぞれのスウユ（地方）の方角に設けられた住居にとどまり、町全体が、三日間食物と火の気を断って、この日を待った。

三、祭典

当日、太陽の昇る前に、インカ王は、王族や高官を伴ない、二百名に及ぶ親衛隊に守られてワカイパタの台座（ウスス）に向う。その他の人々は身分にしたがってつぎの広場クシパタに集まる。すべてが秩序正しく、静寂と敬意にみちて東方を見守もり、日の出を待った。やがて太陽が昇りはじめると、彼らは秩序正しく足でリズムをとり、歌をうたいはじめる。太陽がより高く昇ると、インカ王は起立して自らうたい、他の人々もそれに唱和し、クシパタにも同じ合唱が行なわれた。つぎに人々は合唱をやめ、満身の注意をこめて東方を見つめながら、彼らの神であり父である太陽に向って、敬虔な祈りをささげる。人々がひざまづいている間、インカ王は立ち上がり、トウモロコシで造った酒チーチャ Chicha[5] のみたされた大杯アキャ Akilla を二つとりあげ、右手にもった杯を太陽にささげ、中身の酒を台座の前に置かれた金の大かめインカ・プイニュ Inka p'uynu の中にあける。その大かめからは美しい石の導管が、大広場から太陽の神殿コリカンチャ Qoricancha へ通じており、人々は太陽がチーチャを飲むものと考えた。左手の杯からは、インカ王が一口酒をのみ、残りは他のインカ族がもつ金銀の小杯に、少しずつ分け与え、他の族長達にも同様

にチーチャが分けられる。

ついで参拝のために、太陽の神殿への行進が行なわれるが、すべての人々は順序正しく神殿の二百歩手前で履物をぬぎ、インカ王だけが神殿の入口で履物をぬいだ。大広場から神殿へは太陽の通り（今のロレト街）があり、サンダルの音と露払いの笞の音だけがしじまに聞えるばかりである。神殿の中には、インカ王と王族のみが入り、礼拝するが、他の族長達は、神殿の外の広場にとどまっている。王は神殿内でさきの二つの大杯を自らの手で奉納するが、族長達は征服された古さにしたがい、自分達の杯を僧侶に差し出す。また同時に、太陽とインカ王に捧げるため、各地から持参した贈り物、すなわち、ヤーマ、とかげ、かえる、へび、きつね、鳥、虫などの、実物より小さいが完全な複製の金銀細工を僧侶に差し出して奉納する。この儀式が終ると、彼らは再び順序正しく各々の広場へ戻るのであった。

四、いけにえ

大昔には、太陽に対して人間のいけにえがささげられた。しかし、彼らはヤーマを供えていけにえとし、同時に次年度の収穫の吉凶を占なう儀式をとり行なう。一匹の白か黒のヤーマを選び、台座の前で頭を東に向けて四人の男が押える。一人の僧がそのヤーマの左横腹を切り、すばやく手を差し入れて生きたままのヤーマから肺臓と心臓を一気にちぎりとる。[6] すべてが上首尾に出来、肺臓と心臓が良き状態で脈うっておれば、つぎの年はすべてがうまく行くと占なう。ヤーマがあばれて人をはねのけ、あるいは臓器が傷ついたりしたときは凶と判断される。彼らは太陽に対して何か過失を犯し、太陽が立腹していると考えて、悲しみにうち沈んだ。それでも太陽に対するもてなしは変らないが、吉兆の場合の喜びと期待は測り知れぬものがあった。

占いがすむと彼らは太陽に感謝をささげ、大僧正ウイラク・ウマ Willaq-uma はつぎのように祈りを行なった。

「おおわが父なる太陽よ、汝の子なるインカ王を照らし給え。汝がそのためにつくり給いしごとく、インカ王は亡びず、つねに勝利者たらしめ給え。おお太陽よ。汝の子なるインカ族を、まもり、彼らのために汝が造り給いし食物やすべての産物をふやし、彼らが病むことなく、飢えと労働に悩むことなく、健やかに育ち、凍ることなく、霰をふらし給うことなかれ。汝の子やその子孫を、幼なくして死なせ給はず、安らかに口糊せしめ生きながらえしめ給え。」

ヤーマの血と心臓による占いは、一般民衆のためにもつずけられた。ヤーマの首を切り、血と心臓が灰になるまで焼けるのを見て吉凶を占うのである。それに用いる火は、太陽から直接与えられる新しいもので、それは、ウィラク・ウマの腕輪チパナ Chipana につけられた、磨きあげた凹面鏡によって太陽光線を集め、少量の綿に燃えうつらせて出来た。この火にすべてが託され、いけにえを焼き、この日食するすべての肉が焼かれる。もし不幸にして太陽光線にめぐまれないときは、数本の棒を用いて火を起こすが、この種の火はあまり価値あるものとは考えられなかった。

このほか、太陽の処女によってつくられたサンク sanku と称するトウモロコシのパンに、ヤーマの血をふりかけ、参会者に配布される。そして再びウィラク・ウマは声高に会衆に告げるのであった。

「汝ら心してこのサンクを食せよ。罪のけがれや、二心をもってこれを食せんとするものは、汝らの父なる太陽がそれを見給い罰を与えられん。汝らに重き労働を課せられん。御こころにかなうものには、造物主、太陽、雷は、報いをたれたまわん。汝らにはこどもと幸なる年月が与えられん。汝らは栄え、食し、その他すべての必要なものをめぐまれん。」

かくして大僧正自ら少量のサンクを食し、他のものが赤児にいたるまで順番にそれをいただき、儀式は終了する。

五、大饗宴と大衆の踊り

人々はこの日のために用意されたチーチャと、焼肉の饗宴にうち興じた。黄金の椅子に坐したインカ王は、王族に

チーチャの杯をまわし、王の名において彼らが諸民族のインディオ達と乾杯することをすすめる。代表者達は、へりくだりながら、太陽の子なるインカ王の恩恵に浴したことを、無上の光栄と思い、彼らは、遠隔地から持参した金・銀はじめ、おびただしい贈物を王にささげる。

地方のインディオは、お国ぶりの得意の踊りを披露する。その衣裳は奇抜なものが多く、クントゥール(コンドル)と称する衣をまとったり、熱帯地方の恐ろしい面をかむり、翼をつけ、顔に絵を描くなど、きそって王の前を行列で踊りながら練り歩く。その間族長達は、インカ王のためにたてた手柄をあらわす彩色の板をかかげて持っている。最後に、インカ族が自ら、この日のために特別に創案した、太陽とその他の天体運行をあらわす、カユ cayu と呼ばれる踊りを、リズムと拍子面白く、連管笛 zampoña、太鼓 tinya、竹笛 quena、鈴 cascabel などの囃子に合わせてくりひろげる。

占いは、第一日の日暮に終るが、饗宴と踊りの歓喜は九日間つずけられた。それが過ぎると、族長達は、首都において太陽の祭典に列したこと、至上の帝王と友情のきずなを新たにしたことを喜こび、それぞれ故郷さして家路についた。

サクサイワマンの大ページェントも、あざやかな色模様の衣服をまとった兵士達が絶叫する、かちどきの声におくられ、インカ王の退場とともに、フィナーレとなった。岩山にあってこの古代劇に圧せられ、陶然となっていた群衆は、われに帰って儀式中人ばらいされていた広場にどっとなだれこみ、なお踊りつずけるインデイオ達の列にまぎれて馳け廻る騒ぎである。

ふと晴れわたった東方の空のかなたに、アウサンガテ Auzangate の白銀の巨峰が、夢のごとく浮んでいるのに気

付いた。クスコをはさんで西方のサルカンタイと共に、インカ民族から神聖な山として畏敬の念をもってあがめられた山[7]である。熱帯の太陽と氷雪の峰。ケチュア民族に対するこのはげしいコントラストの自然は、あたかも彼らに君臨する王のごとく、人々を畏怖せしめるほどの威厳を具えるものであった。

(1) インティ Inti はケチュア語の太陽、ライミイ Raymi は祭りの意味である。
(2) 年代記作者(クロニスタ)として、ガルシラソ・デ・ラ・ベガ、クリストバル・デ・モリナ、シエサ・デ・レオンなどの著作にもとづく。書名は文献表参照。
(3) ペルーの北端は殆んど赤道に位置し、南端はおよそ南緯十七度、クスコは十三度半にあたる。
(4) チンチャイは、ピューマでアメリカ・ライオンとも呼ばれている。
(5) チーチャはトウモロコシから作った濁酒(ドブロク)のような酒で、ビール程のアルコールを含む。砂糖黍から作る焼酎のようなカニャッソとともに、今日でもインディオの間でひろく飲まれている。
(6) 今日のインティ・ライミイでは、ヤーマは殺さず、模造の心臓を用いて、とり出すマネごとをする。
(7) 彼らは、これらの山を、Apu Salcantay, Apu Auzangate と称している。Apu は大公の意。

三　インカの記録法キープ

インカ帝国がペルーを中心として南米西北岸に栄えたのは、十五・六世紀のことで、スペインの侵略が行なわれた一五三〇年代の直前数十年間が最盛期である。彼らがその政治権力、富、造形文化などにおいて、たぐいまれなすぐれたものを有したことは、最初のスペイン人を驚かせたばかりでなく、近年の学術調査によって、いよいよ確実に認められるにいたった。しかし、何といってもこの国の文化が、絶海の大陸に、殆んど同系統の民族にかぎられた世界以外に接することなく、孤立していただけに、アジアやヨーロッパの文化と、本質的に相異する点のあることはおお

えない事実である。その理由の中で、おそらく最大の特色をなすのが文字を知らなかったことではないかと思う。彼らはアルファベットはもとより、象形、表意乃至は絵文字すら有しなかった。様々な絵模様によってそれのもつ意味が考古学者によって吟味されているが、確たる裏付けは行なわれていない。彼らの記録は、口づてに語られ、謳われた。彼らの文学及び歴史は、文章ではなく、歌や物語りの中に語り伝わったものである。今日インカ文化に関する史籍の中で、オリジナルの史料とされているもののすべてが、侵略当時及びその後、スペイン系の年代記者(クロニスタ)達によって右のごとき口伝にもとづき、はじめてスペイン語にうつされたものである。したがって、インカ時代の直接の研究は考古学によるほかなく、史学研究の最大の盲点となっている。

それでは、あのような大帝国を統治するにあたり、命令を伝え情報を得るため、あるいは記録保存のために、文字に代るいかなる方法が用いられたか。ここに彼らののこした記録法として、キープ Quipe、Khipu の使用がとりあ

キープをあつかう専門家キープカマヨ　左下にあるのは計算器
マソン「ペルーの古代文明」229頁より

げられる。クロニスタの中には、キープによって王の事績とか、詩歌まで記されたのではないかと見る人がある。[1] また呪術や占いに用いたのではないかとする近代の学者もある。[2] しかし、かりにそうとしても、それらは作者以外には解釈の出来ないものであり、むしろそれは記憶を援ける記号と見るのが、通説となっている。

単純な種類のキープは、歴史上いたるところで使用された記録がある。しかし、インカのそれは、きわめて高い水準のもので、その用途はかなり広かったのではないかと考えられているが、ただ一つ遺憾なことは、今日発見されているインカ時代のキープは主に、海岸地方の乾燥した沙漠の墓から出たものであり、スペイン侵略当時、まだ多く存在したキープが、異教徒の「魔術の書」、「偶像崇拝の道具」として多く廃棄され、解読の鍵を知らぬままに顧みられず、後の研究を極めて困難ならしめていることである。

キープとは、「結び目」、「こぶ」の意である。この「結び目」をつけた多くの紐をつらねており、紐の色、「結び目」の位置と数に意味があり、主に数の記録に用いたらしい。現存する古代キープは、形や複雑さがまちまちであるが、普通太目の数センチから一メートル位の主軸をなす紐と、それに数本あるいは時に百本にも達する枝紐がつき、「結び目」は、その枝紐につけられている。枝紐は色の異なるもの、「結び目」の形の違うもの、たばねて主軸につけられたもの、さらに補助紐をつけたものなど様々で、「結び目」によって数を、色やその他によって、おそらく数える対象物の性質をあらわすものとみられる。

研究者の今日まで明らかにしたところでは、ケチュア族が日常十進法を用いているので、数の記録も、十進法にもとづき、一つの「結び目」は一をあらわし、二から九まではその数に応じて「結び目」あるいは巻きつけの回数をふやす。ゼロの表現はその場所を空白にする。位どりは、主軸からの距離によって定められ、一桁は一番主軸からはなれたところ、二桁三桁となるにつれて、主軸に近くなる。現存するものの中、千位をあらわすものはごく少数であるが、

一万をあらわすものが一例だけある。同じ場所にあらわす数の回数だけ紐をまきつけ、複数をあらわす方法は、一桁にかぎられており、二桁以上は、「結び目」をその数だけこしらえて示す。使用の目的は、統計的記録が主で、これを用いて計算をしたとは考えられない。人口調査、家畜や農産物の数量をこれにうつして、記憶に役立てた。

古代キープは、その製作・使用に、専門的にこれを扱う人キープ・カマヨ Quipucamayoc がいた。彼は色やその他の特色に応じて、キープを作り、また判読した。クスコからタワンチン・スウユ（インカ帝国）に向ってインカ王道が通じているが、王の命令はキープに仕組まれ、飛脚チャスキ chaski が無類の速度[3]で駅から駅に走って伝えた。そのほか貢納、軍役等に関して、キープの効用は測り知れぬものがある。しかし、要するに、これは記憶の手段であって判読法を理解する人でなければ用いられず、言葉による口頭の伝達を補足する道具であった。

(1) 年代記作者ガルシラソ・デ・ラ・ベガは、Comentarios Reales De Los Incas の第八章、ペルーの記述において、キープの効用を最大限にとりあげ、また同じく年代記作者のアントニオ・デ・ラ・カランチャも、完全な記述法としてキープをとりあげる。文献表参照。

(2) スエーデンの学者ノルデンショルドは、海岸地方の古墳から発見したキープにより、これを計算や記録のものではなく、主に呪術に用いたのではないかとしている。文献表参照。

(3) チャスキは今日でもペルーの山間僻地に伝達者としてのこっているが、決してスピードは早くない。しかしインカ帝国ではこれ以外に通信の方法はなく、インカ王道をつたって彼らの伝達力は、駅から駅へリレーすることにより、一日に一四〇哩（二二四粁）に及ぶといわれる。（マソン「ペルーの古代文明」一六七頁）

四　現代のキープ

インカ時代のキープを判読する鍵、あるいはその裏づけとして、現代のキープの研究が行なわれている。アンデス山系のごくまれな地方であるが、インディアン部落において、今日なお簡単なキープの使用されていることが発見さ

れ、その意義が明らかになった。

ここに紹介するキープの実例は、クスコ東北方パウカルタンボ郡 Paucartambo のインディオ部落から出たもので、クスコを距たること百粁の地点にある。発見者は、クスコ大学教授オスカー・ヌーニェス・デル・プラド博士で、現在政府の奨励金を得て山間地方の土人部落に入り、人類学・社会学的見地から研究調査にあたり、この国の懸案たるインディオの生活向上に関する資料を探究中であるが、同博士のキープ発見は一九五〇年になされた。

パウカルタンボは（地図2参照）、ヴィルカノータ山系に属し、われわれの踏破したアヤカチ山群 Ayacachi はじめ数多くの高山を擁する山岳地帯と、アマゾンの最上流をなすパウカルタンボ河が貫流する三千メートル級の高原（パンパ）を含み、交通機関としては、ただ一本の主要道路を走るバスとトラックぐらいで、山間部への連絡は馬の背をかりる以外に方法なく、きわめて原始的な地方である。しかし、インディオ達が、とくに昔のままの生活様式を伝えるところとして注目されている。

インカ時代には、土地は王のものをのぞき、地方の親族集団であるアイユウ Ayllu の共有物であり、共同作業による耕作がなされ、各家族は労働力に応じて土地の配分をうけた。スペインの植民地となってからは、平和なアイユウは人頭税になやまされ、また十九世紀に入って行なわれた独立戦役は、スペイン系の少数の地主が本国の干渉を逃れるための戦いといわれるほど、原住民インディオの利害は無視せられていた。ことに、一八二一年以来共和国政府は、アイユウの共有地を個人に転売することを許し、インディオの土地は、大部分がスペイン系の大農園アシェンダ Hacienda に吸収され、少数の地主の所有となった。しかし、地主は都会に住むことが多く、アシェンダにおける農牧は、インディオにまかせられ、彼らは半奴隷的最低の生活を与えられて、アシェンダ内に、アドベの小屋住いをし[1]、動物とともに泥まみれの生活を余儀なくされる。彼らは日曜日に村に出るが、その重要な用件は、アシェンダの管理

者の命令をうけるためであった。

管理者には、頭(かしら) mandón のほかに、補佐役として、会計係 contador 及びアラリワ Arariwa がおり、アラリワが直接農牧にあたるインディオに接する役柄である。キープは、この農業牧畜の管理上、記録保持のためにいまもなお用いられているのである。

すなわち、収穫が終ると、同じ種類のジャガイモを袋に入れ、その袋の数をキープにとどめる。またトウモロコシも袋に入れ、同様に袋の数をキープにとどめる。ヤーマや羊などの家畜の数も、それぞれ、ヤーマや羊の毛で編んだ紐のキープで記録する。そして管理者達は、頭、会計係、アラリワがそれぞれインディオと同じキープを保持することになる。

これらのキープが、実際どのように数を記録したのか、デル・プラド博士は十の実例を示しているが、同種類のものを省略し、そのうち四種類について図版にしたがい説明しよう。

図版一 〔出所〕 トトラニ Totorani 部落 〔色彩〕 赤 〔表示数〕 二、三三三

一本の紐を二つ折りにし、その折目に近いところから、二つの「結び目」をつくり二千をあらわす。そのつづきの一重の個所で三つの「結び目」をつくり三百をあらわし、そのつづきを二重にして三つの「結び目」をつくり三〇をあらわす。一桁はさらにその先の一重の個所に三つの「結び目」をつくって三をあらわす。これは一本の紐を用いるもので、四桁から順々に一桁までつくる最も単純な方法である。

図版二 〔出所〕 クシパタ Kusipata 部落 〔表示数〕 二、六四五

長さ一・六五メートルの二本の紐を、それぞれ真中から折って二重にし、それを束ねて端から一部分をより合わせる。

図　版　Ⅰ

図　版　Ⅱ

図　版　Ⅲ

図　版　Ⅳ

四桁の位はより合わせた部分をさらに二つに折って、八本の紐からなる一番太い個所に、二つの「結び目」をこしらえて二千をあらわす。つぎに四本たれている紐の三本を合わせて、その個所に六つの「結び目」をつくり六百をあらわす。つぎの二本を合わせて四つの「結び目」をつくり四〇を、最後に一本の個所で五つの「結び目」によって五をつくる。

これは、ボリビアのクツスマ Kutusuma[2] にて発見された現代のキープと同じ性質のものである。

図版三　〔出所〕カクパタ Q'acupata 部落　〔表示数〕三、四五八

四本の紐を先端で一つに合わせたものか、あるいは二本を真中で二つ折りにし、合わせて四本にしたもの。その中の一本の、一番根もとに近いところに三つの「結び目」をつくり三千をあらわし、つぎの紐では、距離をあけてさきの紐の千位の終った場所から四つの「結び目」をつくり四百を、そのつぎの紐では百位の終ったところから五つの「結び目」によって五〇を、さらに同様にしてつぎの紐に八つの一桁の数をこしらえる。

図版四　〔出所〕サンシバンバ Sansibamba 部落　〔表示数〕三七六

一本の紐を二つに折り、その一番上に三つ「結び目」をこしらえて三百をあらわす。つぎにそれにつづく一本で二桁をつくるのであるが、五〇と二〇を別々にまとめて七〇をあらわし、他の一本で一桁の六つの「結び目」をつくる。五〇を一まとめにするのは、片手のこぶしに似せたものといわれる。「結び目」を一つずつ離さずに、このようにかためるのは、古代キープでは通常一桁の数に限られている。

(1)　アドベ（土れんが）長さ四〇センチ、幅一五センチ、厚さ一〇センチぐらいの木わくに、土を水でねり、針状のイチュ Ichu という草をしんに入れ、わくで形をつくったのち太陽熱で乾燥させたもの。インディオはこれを背丈ほどにつみ上げ、小さい

入口をつけて、穴ぐらのような小屋をつくる。

(2) ドイツ人考古学者ウーレによる、ボリヴィア、クツスマの現代のキープは、十九世紀の終りに発見されている。文献表参照

参考書目

クロニスタによる史料的叙述

1 Calancha, Antonio de la, Crónica moralizada del orden de San Augustin en el Perū con sucesos exemplares vistos en esta Monarchia……Barcelona, 1639.

2 Cieza de León, Pedro de, The Incas of Pedro de Cieza de León, transl. by Harriet de Onis, ed. with Introduction by Victor Wolfgang von Hagen, The Civilization of the American Indian Series, No. 53, University of Oklahoma Press, 1959.

3 Cobo, Bernabé, Historia del Nuevo Mundo, Tomo III, IV, Cuzco, 1956.

4 Garcilaso Inca de la Vega, Commentarios Reales de los Incas, Estudio preliminar y notas de Jose Durand, 3 tomos, San Marcos.

インカ文化全般に関する研究

1 Baudin, Louis, El Socialista de los Incas, Chile, 1940.

2 Bingham, Hiram, Lost City of the Incas, the Story of Machu Picchu and its Builders, New York, 1956.

3 Huber, Bertrand, Im Reich der Inkas, Switzerland, 1951.

4 Kropp, Miriam, Cuzco, Window of Peru, New York, 1956.

5 Mason, J. Alden, The Ancient Civilizations of Peru, Penguin Books, 1957.

6 Molina, Cristóbal de, 'The Fables and Rites of the Yncas.' Translated and edited by Clements R. Markham, in Rites and Laws of the Yncas, pp. 1–64. Hakluyt Society, London, 1873.

7 Prescott, W.H., History of the Conquest of Mexico and History of the Conquest of Peru, New York, Modern Library Giants.

8 Rowe, John H., An Introduction to the Archaeology of Cuzco, Peabody Museum, Report No. 2, 1944.

9 Rozas, E. A., Cuzco eternal city and archaeological capital of South America, Peru, 1950.

10 Von Hagen, Victor W., Highway of the Sun, New York, 1955.

とくにインカ・ケチュア文化キープに関するもの

1 Chavez Ballon, Manuel, Inti-Raymi, Fiesta del Sol, Cuzco, 1955.

2 Nūnez dèl Prado, Oscar, El Khipu Moderno, Cuzco, 1951.

3 Locke, L. Leland, 'The Ancient Quipu, a peruvian Knot-Record', American Anthropologist, XIV, pp. 325–32, 1912.

4 ——, The Ancient Quipu, a Peruvian Knot-Record, New York, 1923.

5 ——, Supplementary Notes on the Quipus in the American Museum of Natural History. Anthropological

Papers, American Museum of Natural History, vol. 30, pt. 2, pp.39–74, New York, 1938.
6 Nordenskiöld, Baron Erland, The Secret of the Peruvian Quipus, Comparative Ethnological Studies. Gothenburg (Göteborg) Museum, vol. 6, part I, Göteborg, 1925.
7 ——, Calculations with Years and Months in the Peruvian Quipus, ibid, vol. 6, part II, Göteborg, 1925.
8 Uhle, Max, 'A Modern Kipu from Cutusuma, Bolivia', Bulletin of the Free Museum of Science and Art, vol. 1, no. 2, pp. 51–63, Philadelphia, 1897.

ケチュア語辞典

1 Gonçalez Holguin, Diego, Vocabulario de la Lengua general de todo el Peru llamada LENGUA QQUICHUA o del Inca, Lima, 1952.
2 Gurdia Mayorga, Cesar, Diccionario Kechwa-Castellano Castellano- Kechwa, Lima, 1959.

邦語による主なるもの

1 石田英一郎「アメリカ大陸の古代文明」世界文化史大系第二巻、誠文堂新光社　一九五八年
2 泉　靖一　インカ帝国—砂漠と高原の文明—岩波新書　一九五九年
3 ——　インカの祖先たち　文芸春秋社　一九六二年
4 増田義郎　インカ帝国探検記　その文化と滅亡の歴史　中央公論社　一九六一年
5 三浦信行　呪術の帝国　秘境チンチェーロ　二見書房　一九六二年

おわりに

一行十名からなるわれわれのアンデス探険行は、先発隊が横浜を出帆したのが四月二日、最後に、少々船の事故もあって、一部隊員の乗った船が、四日市港に帰着したのが、十一月七日という、七カ月にわたる大遠征であった。探険隊の主たる目的は、北部ブランカ山系にあるペルーの最高峰ワスカラン（六七六八米）登頂と、南部ヴィルカノータ山系の処女峰踏破にあったが、クスコにおける学術調査も初めから予定されていた。アンデスが近年ヒマラヤについで、探険の脚光を浴びている理由は、六千米級の残された処女峰のほかに、インカ文化やインディオ社会の学術調査にあり、この意味の探険が従来から少なからず行なわれた。一九六一年度においては、大きいものだけで、ドイツ、イタリア、日本から二隊ずつ、イギリス、アメリカ、ブラジル、スペインから一隊ずつ計十隊が入山したが、何らかの学術調査を伴うものがかなりあった。

われわれが、クスコからヴィルカノータ山系のアヤカチ山群に入ることは、この地方が考古学的にも勿論未踏地なので、出発時から東大泉教授に新発見の期待をかけられていたし、また現地のクスコ大学シャベス・バイヨン教授からは、とくに五千米以上の高地で、いけにえにして洞窟におさめられた小児のミイラ発見を期待されていた。それらにはこたえることが出来なかったが、クスコ考古学博物館が宝物のように大切にしている高さ三〇センチばかりの金銀二体のイドラ（人体像）は、われわれが、車をすてて最初キャンプを設けたマワヤニ部落附近から、道路人夫によって掘り出されたものである。五十年前、かのビンガム教授によるインカ最大の遺跡マチュ・ピチュが発見されて以来、深山の秘境に数々の謎をひめて滅亡した民族であるだけに、学者の期待とともに、好事家の好奇心も強く、入山時に筆者は、間違いないインカ遺跡へ案内しようという申出を、手紙ではあったが二カ所からうけてとまどったほど

である。

ひるがえって、現地に博物館や個人のコレクションをたずね、遺跡をまのあたり見ることは、先学による研究業績を文献で知る以上にインカ文明を筆者のイメージに深くきざんだ。その精巧さは想像以上であった。しかしそれと同時に、この文化が、なにか大きいものを欠いていたということが、一方で強い印象となってのこっている。鉄、車、馬、文字などを知らなかったということは、旧大陸が、トウモロコシ、ジャガイモ、トマトなどを知らなかったことと、比較にならぬほどの意味をもつものではないか。とくに文字を知らなかったことは致命的である。しかし私は、それらのもののあるなしではなく、他の文明圏との接触の問題に重点を置きたい。どの時代のどの地方の文化でも、他文化の刺激なしに成長するものはなく、孤立文化は欠点がいつまでも残って円熟しない。とくに文字は、記録の効用のほかに、それとともに伝えられる外来思想の啓発をうけるからである。外界との杜絶えが、文化の進運に敗北者たる尤なる原因であることを、われわれは身をもって承知している。けだし、日進月歩の世界にあって、文化的孤立停滞は、なにも地理的に隔絶された世界にかぎらない。為政者による知らしむべからざる政策、人に耳をかさない尊大さが、どこにでも文化の谷間を作るのではないか。これらのことは、日ごろ外来文化過剰のために、消化不良や自己喪失をなげかれている現代のわれわれの知識社会にとって、この刺激と切磋琢磨が、曲りなりにも文化水準に遅れをとらせない原動力なることを、再認識させるものにほかならないと思う。

一九六二年四月

――関西学院大学文学部教授――